

野尻抱影・星座神話

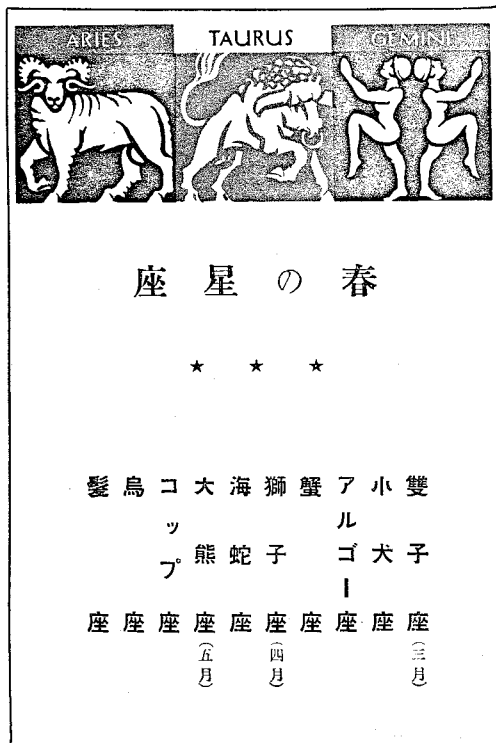
石田 五郎

“もし「天球」の定義から天文学に入るのを、まっ直ぐ正面玄関に導かれるのに譬へれば、星座とその神話傳説からこれに入るのは、廻り路ながら花園の中を逍遙してそれぞれの花物語を聞いてから、さうするのに似てゐるでせう。”(原文ノママ)

星座は天文学への入門の大きな魅力のひとつである。春は“ふたご・小犬・アルゴ・かに……”，夏は“りょうけん・乙女・牛飼・さそり……”と季節ごとにその表情をかえてゆく星空の美しさは、春は花、夏は若葉、秋は紅葉とうつろいゆく地上の風景にも似て、私たちの生活をゆたかなものにしてくれる。

星空への開眼は人によってさまざまである。星図をたよりに独力で暗記していった人、プラネタリアムの解説で初めて星の美にふれた人、身近な人から“くちうつし”に星座を教わった人、あるいは或る本が決定的な要因となった人。

昔、有楽町の東日(現在の毎日新聞)本社に、東京では



はじめてのプラネタリアムが開設され、この人工の星空にひかれて1年ほど通いつめた少年時代がある。そしてまたよみすてて戸棚の中にほうりこんだ科学雑誌をとり出して、あれこれと星座解説の記事をスクラップした記憶もある。

抱影先生のこの「星座神話」の本にお目にかかったのは、神田の三省堂の書棚であった。グレイの表紙に白クロスの背革、その上に金文字で「星座神話☆☆☆野尻抱影」とほどよい大きさがかかれてあった。

その頃の神田は駿河台下から神保町まで軒並の古本屋街で、そのはずれにある大きな新本屋は専門書の多い東京堂、暗くて何となく気むづかしい感じの富山房と並んで、三省堂は広く明るかったが、やはり学生参考書が主要部を占め、子供心にも何となくザッパクなものに感じた。

私の生家は上野で、神田へは土曜の午後などよく自転車によって本屋まわりをした。そしてその三省堂で目的の参考書をかいたあと、書棚の間をブラブラと歩きまわって、ふとこの本の白い背革(クロス)が目に入った。

区分は何の棚であったかすっかり忘れてたが、下から3段目、左から5冊目にこの本が立っていた。朱の鹿の姿をあしらった黄色の紙ケースから、この本をぬきだしてまず目についたのは、表紙・ウラ表紙の見返しにある北天・南天2葉の古星図であった。(はしがきによれば、これは1801年ライブッチ出版、ギリシャ詩人アラトスの天文詩「ファエノメナ」のさしえであるという。)

星座毎の解説は、まずギリシャ、ローマ、イギリスの詩人の詩の一節にはじまり、詳細な神話の解説、そして星の名の由来とつづき、簡潔でわかり易い星座図の他にその星座の登場人物に因む絵画・彫刻の写真が豊富に頁の間をうめている。シシリー島のディオスコロイ(双子の神殿、ティチアーノ画く“アルテミスの水浴をのぞきみる獵夫アクタイオン(大熊)”)射場保昭氏撮影のほのかな“プレセペ星団の写真(蟹)”“ヘーラクレースとネメアの大獅子”はルーヴルにあるギリシャのつぼ絵である。こうして名画・彫刻をたのしみながら、つぎつぎと星座が紹介されていく。

ひとつの季節が終ると、やや長い詩句のしめくりがあり:

春はダンテの「神曲・第13歌」北斗のかがやきを歌い、夏はボォル・フォォルの詩、こおろぎがなく夏の夜の銀砂子を、秋は高青邸の詩「南湖をすぎて」月未だ出でずして、藜霞露凄凄たりと、斗柄水に挿んで低しと地平によこたわる大熊座に秋の深きをつける。

冬は建礼門院右京大夫の日記より、叡山のふもと坂本から東の方に眺める星月夜の美しさをたたえた一節が引用されている。

“月をこそ眺めなれしか

星の夜の深きあはれは今宵知りぬる”

右京大夫の発見は、新村出博士「南蛮更紗」によるもので、この短歌は、日本人が初めて星空に感動してつくった歌であることは後になって知った。

また、各季節のはじめには、黄道十二宮の3星座をカットにして、シャレた扉がつけられている。

土曜日の午後の雑踏の中で、人にもまれながら立読みして、星座の展開をたのしんだ。

白鳥座ではダヴィンチ派の画家の描く、スパルタ王妃レダの裸像園が、まぶしく、また妖しい胸のときめきに思わず頁を閉じたのをおぼえている。

この本の値段は、少年のこづかいにはとてもかいきれないもので、その日から毎月こづかいの貯金をはじめ、毎月神田の街を訪れては、この本が売れずに残ってほしいと願い、そして同じ書棚の同じ位置にこの「白い背革」を確認してホッと安心して家にかえる。

そしてこの本を我が物にしたのは、4カ月目であつたらうか。天下にこの本がここに一冊しかないと思ひこんでいた少年の幼さがいまなつかしく思いだされる。

☆ ☆ ☆

武蔵野の真中にある高等学校の寮にもこの本を抱いて入った。友人が借りていき、背革が少し手垢でよごれて返ってきた時は悲しかった。しかし葉のおちつくしたくぬぎ林の散歩道で、梢ごしに眺めるオリオン、大犬・小犬はいまでもすぐに目に浮ぶほど美しかった。座右の書としてよみふけたわけではなかったが、いつもこの本は「お守り代り」に私のそばから離れなかった。寮の便所に「星を見よ!!」と落書をしたら、「犯人はお前だろう」とすぐに発覚したから、あるいは他人には私の星好きは有名であったのかもしれない。

3月10日の大空襲にも、この本を背袋に入れて火の手から逃げた。信州諏訪の天文学教室の疎開先にも持参して山国の星空の美しさに空腹を忘れた。そして岡山への移住にも、この本はコンテナにつめず、カバンに入れて抱いて運んだ。

☆ ☆ ☆

この本は抱影先生の処女作「12カ月・星座巡礼」に次いで、特に神話物語りに重点をおいたもので「春夏秋冬・星座神話」と銘うって、昭和8年に刊行されたが、神話→天体解説→星座図→名画という日本における星座案内のひとつのプロトタイプ(原型)をうち出したもので、もちろん「旧カナ使い」であるが内容は今日もなお新たである。私の所蔵本の奥付けは、昭和11年8月20日、第4版、発行所・研究社「定価金貳圓」である。手あかだまみれ、金文字もうすれているが、私にとっては肌身からはなせない本のひとつになっている。

(東京天文台岡山天体物理観測所)

1972年2月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	—, —	6	—, —	11	—, —	16	—, —	21	9, 156	26	—, —
2	—, —	7	—, —	12	5, 37	17	—, —	22	10, 155	27	—, —
3	7, 39	8	6, 27	13	—, —	18	9, 131	23	—, —	28	7, 47
4	—, —	9	6, 21	14	7, 50	19	—, —	24	4, 131	29	7, 61
5	—, —	10	—, —	15	12, 77	20	9, 83	25	4, 114	30	*

(相対数月平均値: 110.5)

昭和47年3月20日	編集兼発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	森 本 雅 樹
印刷発行	印刷所	〒112 東京都文京区水道2-7-5	啓文堂松本印刷
定価 175 円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話武蔵野 31局 (0422-31) 1359	振替口座東京 13595